

集

俳句フォーラム

2017年10月 第65号

白山句会

夏 姿

田中藤穂

華やげる南瓜のバルーンビル薄暑
緑陰に八幡様の力石
黒揚羽空に近づく薬草園
十三階上銀座一望梅雨曇
ユニクロの窓のマネキン夏姿

明易し

浦川哲子

明易し札幌三時五十分
父の日や研ぎしままなる彫刻刀
沙羅散るや地球の危機と思える日
病葉や天命はわが手のひらに
月山を望む街道さくらんぼ

余花残花

平野無石

とりわけて楨のみどり葉遅しき
京橋の大根河岸碑飛花落花
開帳の八幡神輿風匂う
ビルとなりし真砂女店跡余花残花
夏雲や見下ろす銀座骨のビル

南瓜のバルーン

都築繁子

南瓜のバルーン
江戸の跡ちりばめ銀座花の散る
春光や蝶ネクタイの靴みがき
温室の開かれ七窓風薫る
花は葉にヤッチャバ跡の木のベンチ

薬科大

植木やす子

光陰を刻む銀座や七変化
芍薬や小さく育てて教材に
河骨も薬草なりし園真昼
青葉風歴史ひもとく薬科大
右書きの大根河岸や花の散る

夏めく

工藤はる子

額の花銀座八丁様変り
緑陰や狛犬は子をしかと抱き
新茶よりうれし戸越の宮のお茶
一つ二つ三つ梅の実ふとり土匂ふ
夏めきてビルの狭間に小さき海

銀座

篠田純子

新樹光屋上庭園風渡る
シャネルビルの前で自撮りや夏至の風
銀座薄暑三愛ビルより双眼鏡
壁伝い花伝い蝶徘徊る
靴みがきの揃いの帽子風ひかる

屋上庭園

大山夏子

京橋に新橋色のチューリップ
春一番二番も過ぎて海鼠噛む
人寄ればおたまじゃくしもうごくかな
おおぜいに見られ囲わる花も老い
屋上に水が流れて額の花





茶

江口九星

茶化しては切り抜けてきた夏の夢
年毎に新茶の挨拶友在りて
ひかりつつ落ちる菜花の雨しづく
鳥声の木々に残響春深し
雨戸操る白チューリップなだれ込む

形なり

大山夏子

椿咲く山路の途中海展け
死支度出来ているかと散る桜
考と私の時間濃密遅桜
夏の海防風林の松の形
十葉や袋小路に人を訪う

母の日

渡辺節子

漆黒に浮く純白の花水木
夜の闇にセロの残響花の雨
母の日の花末っ子が一番目
母の日は掃除ロボット来たりし日
夏の宵バツハの後のもんじゃ焼き

紋白蝶

石川賢吾

倒木の微かな湿り葉ゆる
菩提寺へ回る山道紋白蝶
三万日生きし祝いや桜鯛
揚雲雀麒麟は顔を空に置く
ひとふりの塩の甘さや白子揚

白昼夢

中川のぼる

春の畑主人と共に地に帰る
弥生尽何事もみな白昼夢
大荒れの空はいつしか春の夢
惜春や飲み残したるハイボール
黒揚羽舞うや流れは悠久に

ほととぎす

伊藤昌枝

山つつじ谷の流れを轟かせ
万緑や自転車隊の向こう
茶柱に今日を占ふ梅雨晴間
縄文の土偶目覚めよほととぎす
涼求め切子グラスのミントテイ

黒鯛

楠本和弘

韜晦も小智も捨てて花見酒
春潮やめくる歌集に砂の音
黒鯛提げ俎板かせと友来たる
海棠の花に茜の雨しづく
妻の背の闇に浮き立つ花菖蒲

つづく春

吉宇田麻衣

花芯落ち赤い歩道につづく春
児らが掘るタケノコ茹でて朝を待つ
春の風揺れる草木に目を閉じて
今のうちと児と手をつなぐ五月晴れ
薫る風散歩いつもと違う道

昼寝

渡部恭子

千本の桜は白し風の道
花は葉に考を手本として生きむ
やや昼寝水使う音細くして
梅雨ごもり茶色の小瓶聴きながら
レガッタの声が水切る夏の雲

夏木立

小沢えみ子

真つ白なノートを開く四月かな
空梅雨やジーンズパンパン叩き干す
予報士や梅雨前線押し上げる
デパ地下の新茶の試飲ほの甘し
夏木立板碑の草書指で詠む

門

酒井たかお

花の門くぐるランドセルには未来
白木蓮落花に容赦なき時間
黒揚羽楽園追はれ彷徨へり
行く道は四季を友とす時鳥
泰山木の花や母校の門護り